

Haste not Rest not

岩手県警本部長室に、「Haste not

Rest not」と記された額がかけられている。新渡戸稲造が揮ごうした書の精妙な写しである。昭和58年頃公安委員長の際にあった中村七三氏（当時糸屋代表取締役）が県警本部庁舎の新築落成に際し贈呈したとある。「急がず 休まず」と訳すことができるこの言葉は、しつかり段取りを定めて、創意工夫とたゆまぬ努力こそ、難題を解決する要諦であることを示している。

新渡戸稲造は生涯において幾度も厳しい試練に直面しながら、そのたびに立ち直り、数多くの偉業を成し遂げている。逆境に直面した時の対処の仕方として、「いかに苦しいことがあっても、自棄になるのは短慮の極みである。逆境にある人は常に『もう少しだ』と行って進むといい。やがて、必ず前途に光が差ししてくる。」という言葉を残している。まさに、逆境を超えていくものとして、ふさわしい生き方を実践してこられた先人の言葉である。座右の銘とも伝わる「Haste not Rest not」が、常にその心の内で息づいていたに違いない。

2020年を振り返ったとき、日本はも

とより、世界中を震撼させたコロナ禍によつて、多くの企業がこれまで経験したことのない危機に直面した。特に、岩手県内の企業は、まもなく東日本大震災から10年を迎えようとした矢先で、さあこれからという時期と重なり、痛手も相当なものがあつたことは想像に難くない。ただし、東日本大震災でたくさんのものを失ったが、幾多のことを学ぶことができたのも間違いなく、この経験はコロナ禍での復元力に必ずつながっていくものと思う。

コロナ禍を克服していく戦いは、長期戦、持久戦が必至で、「急がず 休まず」取り組むことが求められる。その際、考えておきたいことが次の二つである。まず、萎縮せずに前向きな経営姿勢を持ち続けることである。東日本大震災の際、経営者の覚悟が企業の明暗を分けた事例を幾度となく目にしてきた。コロナ禍で会席等が減少した盛岡の料亭では、むしろ新たな商品開発や従業員の再教育などを手がける良い機会と捉えている。この問題が一段落した時に、これまで以上のサービスでお客さまをお迎え



一般財団法人岩手経済研究所
理事長

高橋 真裕

できる体制を整えようと、落ち込んでいる暇もないほど、積極的に事業の見直しに奔走している。八方塞がりという状況でも突破しようという熱意、トップの明確な姿勢、社員の結束力があれば道は開けるといふことであろう。チャンスは備えのあるところに訪れるという格言をもう一度かみしめたい。

もう一つがお客様との関係強化である。コロナ禍によつて経営環境が劇的に変化したと受け止めている経営者は多い。リモート社会が広がりを見せる中、お客さまに会って話すことの大切さを改めて感じているとの声も多く聞かれる。企業はお客さまがあつて成り立つという商売の原点を思い起こし、もつとお客さまに親しまれ信頼される企業になるために、会うことの大切さを再確認することではないかとの思いを強くしている。

節目の一年である。変革というのはい度に劇的に変わるものではなく、日々の積み重ねによつてある日こんなにも改善していたと気づくものだという。まさに、「急がず 休まず」ぶれずに進む一年にしたいものだと思う。